

歩いていると、紫陽花の鮮やかな色にふと目が留まりました。しばし心を奪われました。心が和みました。運転していると、紫すぎる紫色が目飛び込んできました。アヤメの季節に入っていたと実感しました。見事な紫色がまぶたに焼き付きました。

思い返しました。今年の春は、桜に心を奪われることはなかったと。コロナで、それどころではなかったと。もちろん、今でもコロナの影響はあります。でも、通常保育が再開し、約1ヶ月が過ぎ、徐々に行事への準備も始まった今日この頃、季節の移り変わりを楽しむゆとりができたのだなと思ったのでした。

園に直接関係する文書とは別に、園に配達される冊子や文書を、全部が全部きちんと読んでいわけではないのですが、一応、ざっと目を通すようにはしています。

最近、ふと目に留まったのが、「倉橋惣三先生の『育ての心』」を読もう。」です。何に書いてあったかという、『全日本私立幼稚園連合会第34回東北地区私立幼稚園教員研修大会 青森大会 集録』です。ちょっと気になったので、パソコンで調べました。読んでみたいと思いました。本屋さんに行きました。売っていませんでした。そこで思いついたのが、中央図書館でした。数年前にもこのようなことがありました。図書館のパソコンで検索しました。「閉」という文字が印字されていました。カウンターに行き、紙を提出しました。書架にはなく、閉まっている別の場所に保管されているということでした。係りの人が「5～10分くらいお待ちください」と、言いました。10分経ちましたが、まだでした。実は、他にも書架にはない本を頼んでいたのです。それは石坂洋次郎の『山のかなたに』という本でした。（20代の頃に読んで、最近、無性に読みたくなったので） 約15分後、『育ての心』と『山のかなたに』を手にすることができました。どちらも、テープで補修されてありました。すごく古いことがすぐに分かりました。でも、手にすることができ、感激しました。よくぞあったと。ちょっと、長くなっていますが、ここでは、何を伝えたいかと言いますと、「本は出あい」「言葉(本に書いてある)は出あい」ということなのです。(何事も出あいだと思いますが) 本は図書館に返してしまったのでネットから。

かつて倉橋惣三(1882～1955)という幼児教育・保育学者がいました。倉橋は、東京女子高等師範学校教授で同校附属幼稚園主事を長年務め、極めて素朴な言葉で保育・子どものあり方を語り続けました。彼の主著である『育ての心』(1936年)、『幼稚園真諦』(初版 1933年・改題 1953年)などは、大正・昭和期の保育現場のみならず、今でも人気の高い保育書です。

今回は、その『育ての心』のまえがきの一部を紹介します。

「育ての心」とは何か。それは、自ら育とうとするもの(子ども)を育てずにはいられなくなる心である。その心によって、子どもと保育者・親とはつながることができ、子どもだけでなく保育者・親も育つことができる。子どもを信頼・尊重し、発達を実現させることもできる。この心は、職務として現れるものではなく、義務として現れるものでもない。自然なものである。

次は本文からの引用です。

自ら育つものを育てようとする心、それが育ての心である。世にこんな楽しい心があるうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとが、互いの結びつきに於いて相楽んでいる心である。

育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉[おお]きな力を信頼し、尊重して、その発達の途に遵[したが]うて発達を遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。

しかも、この真情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱く我が子の成育がある。日々に相触るる子等の生活がある。斬[こ]うも自ら育とうとするものを前にして、育てずしてはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。

それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。

借りた本は、とても古い本でしたが、今読んでも色あせてはいませんでした。